

参議院外交防衛委員会会議録第三号(その一)

平成二十三年十一月二十二日(火曜日)

午前十時開会

出席者は左のとおり。

委員長 福山 哲郎君
理事 風間 直樹君
谷岡 郁子君
猪口 邦子君
佐藤 正久君
山本 香苗君

委員

一川 保夫君
加藤 敏幸君
北澤 俊美君
佐藤 公治君
榎葉賀津也君
山根 隆治君
宇都 隆史君
岸 信夫君
山本 一太君
山本 順三君
山口那津男君
小熊 慎司君
舛添 要一君
山内 徳信君

國務大臣 外務大臣 玄葉光一郎君
防衛大臣 一川 保夫君
副大臣 外務副大臣 山根 隆治君
環境副大臣 横光 克彦君
防衛副大臣 渡辺 周君

大臣政務官 外務大臣政務官 加藤 敏幸君

防衛大臣政務官 下条 みつ君
事務局側 常任委員会専門員 矢嶋 定則君

政府参考人

内閣法制局第一部長 横島 裕介君
法務大臣官房審議官 團藤 丈士君
外務大臣官房参事官 宮島 昭夫君

本日の会議に付した案件

○理事の辞任及び補欠選任の件

○政府参考人の出席要求に関する件

○外交、防衛等に関する調査

(米海兵隊の豪州駐留に関する件)

(防衛大臣の宮中晩餐欠席に関する件)

(在日米軍再編問題に関する件)

(自衛隊による放射性物質汚染地域の除染に関する件)

(自衛隊の東日本大震災への対応に関する教訓事項に関する件)

(国際的な腐敗防止とODAに関する件)

○経済上の連携に関する日本国とペルー共和国との間の協定の締結について承認を求めるの件

(内閣提出)

○経済上の連携の強化に関する日本国とメキシコ合衆国との間の協定を改正する議定書の締結について承認を求めるの件(内閣提出)

○委員長(福山哲郎君) ただいまから外交防衛委員会を開会いたします。

議事に先立ち、一言申し上げます。

本院議長西岡武夫君は、去る五日、逝去されました。誠に哀悼痛惜に堪えません。

ここに、皆様とともに謹んで黙禱をささげ、哀悼の意を表しまして、御冥福をお祈り申し上げますと存じます。

どうぞ御起立を願います。黙禱を願います。

(総員起立、黙禱)

○委員長(福山哲郎君) 黙禱を終わります。御着席願います。

○委員長(福山哲郎君) まず、理事の辞任についてお諮りいたします。

榎葉賀津也君から、文書をもって、都合により理事を辞任したい旨の申出がございました。これを許可することに御異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○委員長(福山哲郎君) 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

この際、理事の補欠選任を行いたいと存じます。理事の選任につきましては、先例により、委員長の指名に御一任願いたいと存じますが、御異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○委員長(福山哲郎君) 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

○委員長(福山哲郎君) 政府参考人の出席要求に関する件についてお諮りいたします。

外交、防衛等に関する調査のため、本日の委員会に、理事会協議のとおり、政府参考人として内閣法制局第一部長横島裕介君外二名の出席を求め、その説明を聴取することに御異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○委員長(福山哲郎君) 御異議ないと認め、さよう決定いたします。

○委員長(福山哲郎君) 外交、防衛等に関する調査を議題といたします。

○風間直樹君 よろしくお願いたします。

今日は、時間の関係で、最初に、先日十一月十六日に発表されましたアメリカとオーストラリアの記者会見の内容について質疑を取り上げたいと思います。

今回の米豪首脳この会見内容、非常に注目すべきものだと思っておりますが、幾つかその会見で示されたポイントがあるだろうと思えます。外務省が防衛省の方で恐らくこのポイントを整理されていると思うんですが、ちよつとその会見の内容についてポイントを踏まえて御説明をいただければ有り難いと思っておりますが、どなたか説明できる方がいらっしゃいますでしょうか。——はい、お願いします。

○國務大臣(玄葉光一郎君) それでは、私の方から、今回の米豪の戦力体勢イニシアティブの概要について申し上げます。

このイニシアティブは、アジア太平洋地域の平和と安定に貢献してきた強固な米豪関係を更に強化するものであり、地域の安全保障の強化及び両国の相互運用性の向上という両国のコミットメントに基づくものである。特にこれは共同発表を基に申し上げますので、引用をお許しをいたしたきたいというふうに思います。

二〇一二年中ごろから、豪州北部及びダーウィンにおいて米海兵隊が毎年六か月程度ローテーション展開し、豪州軍との演習訓練を実施。展開規模は二百五十人程度から開始をし、最終的には、航空機、陸上車両、砲兵等を含む二千五百人規模の海兵空地任務部隊、MAGTFの構築を目

指すと。報道によれば、五年程度の間に実現をされるということでございます。豪州北部における豪州軍の施設・区域への米空軍機のアクセスを拡大をし、米豪空軍共同の演習訓練の機会を拡大をする。

本イニシアティブは、アジア太平洋において、地理的に分散し、運用面での高靱性、レジリエンスの訳だと思えますけれども、高靱性があり、あるいは強靱性と訳してもいいのかもしれないが、政治的に持続可能な米軍のプレゼンスを実現するための一環、また、地域の関係国との軍事演習等の協力拡大を可能とする。合同訓練機会の増加、相互運用性の深化等を通じて、米豪両国が人道支援や災害救援を含むアジア太平洋における幅広い危機に対して迅速かつ効果的に対応することを可能とすると、こういう概要だということになります。

○風間直樹君 ありがとうございます。

いろいろと分析やら報道やらを見えますと、今後の展開の可能性にも触れられている部分があるようにあります。

二点申し上げますと、まず、豪州北部及び西部の空軍基地に米軍の戦闘機、爆撃機、空中給油機、輸送機等が今後駐留していくだろうと。それからもう一点は、ダーウィン及びパース付近のオーストラリアの海軍基地では、ここは既に米戦艦の寄港地だそうでありまして、さらに米艦船、潜水艦の寄港地として設備が拡充される予定だということでもあります。

このように、今回の発表内容を見ますと、東南アジアのみならず東アジア一帯に与える影響が非常に大きい新たな米軍のプレゼンス展開への一歩だということにも受け取れるわけですが、外務大臣、防衛大臣はそれぞれのお立場で、今回の発表の意義について、あるいは東アジアそして日本への影響について、どんなふうにお考えでしょうか。

○国務大臣(玄葉光一郎君) 先ほども概要の中でも、発表の中でもまたございましたけれども、基

本的にアジア太平洋地域において米軍がよりコミットを強化すると、こういう趣旨であり、同時にその政策を具体化するというものだとおっしゃるに考えております。基本的にはこの地域における米軍の能力を向上させるものであるということに考えております。

同時に、米豪間がこういう形で同盟関係のある意味深化をさせているわけでありまして、同時に、日豪の間で今2プラス2という枠組みがございますから、やはりこの2プラス2をできるだけ早期に開催をして、しっかりと調整をしたいというふうにも思っております。

同時に、これは在日米軍の再編に影響するものではないという説明を米側から受けているということも併せてこの場をお借りして申し上げたいというふうにも思っています。ただ、私の方からは外務省の担当者には、米軍と豪州と今回の問題あるいは今後の展開等々について、より緊密に協議をして意思疎通を図るようという指示をこれまでしているところでございます。

○国務大臣(川保夫君) 私も今外務大臣が述べられた考え方と基本的には同じなんですけれども、私自身も十月二十五日、パネッタ国防長官との話合いの中でも、アジア太平洋地域におけるこういった米軍のプレゼンスを維持強化したいというアメリカ側の意思表示も当時からございました。そういう中であって今回具体的にそういう発表がなされたという面では、アジア太平洋地域における平和と安定という観点からすれば、我が国の防衛上からしても歓迎すべきことではないかなというふうにも思っております。

ただ、在日米軍の再編問題との絡みは、今のお話のように、直接関連するという説明は我々も聞いておりませんけれども、こういう問題にしっかりとまたこれから関心を持っていろいろな情報キャッチする必要があるであろうというふうにも思っております。

○風間直樹君 今回の発表の意味につきまして、私なりに考えると幾つかございます。

一点は、発表のタイミングなんです。今回はちょうど、ハワイでのAPEC首脳会議とそれからインドネシアでの東アジア・サミット、このほかにオバマ大統領がオーストラリアを訪問して発表が行われました。この発表が非常に絶妙なタイミングだったんではないかと思っております。

二ユースで東アジア・サミットの様子を、首脳会議の様子を見ておられて非常に印象深い場面があったんですが、ちょうどオバマ大統領と中国の首脳が隣り合わせの席に座って、中国首脳側からオバマ大統領に対して頻りに接しているのは会話を求めているシーンが放映されていました。そこでの両者の、お二人の様子がまさに今の両国の力関係というものを象徴しているように、そういう雰囲気を感じたわけでありまして、まあ一言で言うと、中国首脳に非常に動揺の気配が見られたというふうにも思っています。

それから、二点目ですが、オーストラリアという、非常に地理的、距離的になかなか絶妙な、微妙なロケーションにあるこの国に関する米軍の配備の発表ということでありまして、いろいろな分析を読んでもありますと、今中国が開発中の長距離打撃力、ミサイルですとかあるいは戦闘機ですとか、いろいろなものが含まれるんじゃないでしょうか、そこを考慮した上で今回アメリカとオーストラリアのこういった合意に結び付いたという分析がなされております。

この中国が開発中の長距離打撃力、これは恐らく東アジアに展開する米軍基地、各地の米軍基地にやはり同様の影響を与えるものでしょうし、日本も、日本国内の米軍基地も例外ではないと思っております。

そこで防衛省にお尋ねをしますが、中国が開発中のこの長距離打撃力というのは具体的にどのようなものなのか、お示しをいただけますでしょうか。

○大臣政務官(下条みつ君) 御質問にお答えさせていただきます。中国というのは、命中精度の高い通常弾頭の弾

道ミサイルを保有しているほか、空母等の洋上の艦艇を攻撃するための通常弾頭の対艦弾道ミサイルを開発中でありまして、また、先生おっしゃっている足の長いという意味では、射程千五百キロ以上の巡航ミサイルのほか、中距離爆撃機など多数保有しております。空母保有に向けた必要な技術の研究開発に向け、国産の次世代戦闘機の開発も推進中というふうにも聞いております。

以上でございます。

○風間直樹君 去年ぐらいでしょうか、その中国海軍の南シナ海あるいは東シナ海への展開が関係国の懸念になってきたところから中国海軍が、いわゆる米艦船、特に空母のこの海域への接近を拒否すると、こういう戦略を展開しつつあるということが言われているわけでありまして、同時にこの長距離打撃力の開発が進んでいるということでありまして、これは我が国にとってもやはり見過ごせない状況なんだろうというふうにも思っています。そういう中で今回の発表ですから、これは我が国の安全保障に与える影響も非常に大きいと、プラスの面での影響が大きいというふうにも評価をしているところでもあります。

更にもう一点ですが、今御答弁にもありましたように、今回の発表は、特に南シナ海における中国の海洋進出に対する抑止、抑制という側面が強いと私は感じておりますけれども、同時に、このオーストラリアという国はマラッカ海峡に非常に近い国でありまして、恐らく距離にして五百キロメートルぐらいかと思っております。このマラッカ海峡に今後米軍が展開していくオーストラリアの基地が非常に至近だということと、それらの基地で米軍に対して様々な補給あるいは設備の更新等ができるということが一つの大きな意味ではないかと思っております。

マラッカ海峡は、御承知のように、シンガポールとマレーシアという国、それからインドネシア、これらに挟まれた海峡でありまして、これも、かつてイギリスのイニシアティブによりましてマレー半島の先端に築かれた国でありま

す。イギリスがなぜここにシンガポールをインシ
アチブを取って築いたかという、これはマラッ
カ海峡の航行の安全性、航行の自由を確保する
と、こういう利益がイギリスにとって当時あつた
からでありまして、現在でもこの要衝としての重
要性は当然失われていないわけでありまして。

私は、今回のこの発表を日本の立場から分析す
るときに、恐らく二つの意味があるだろうと思つ
ています。一つは、このマラッカ海峡の安全性が
日本にとつてもより一層担保される結果となつた
ということだと思ひます。これまで米國は、対テ
ロ戦争ということでイラク、それからアフガニス
タンで戦闘を続けてまいりましたが、それもほぼ
終了のめどが付いた。そして今、いよいよアジア
へのプレゼンスの展開を本腰を入れて始めよう
としている。この対テロ戦争を継続中は、やはり
シーレーンの安全性の確保という意味で私はいさ
さか不安なものを感じていた部分がございます。

テロ行為によるシーレーンが脅かされると、こ
ういふ可能性もあつただろうと思ひますが、これ
がほぼ懸念が払拭されたことと、同時に、オース
トラリアの駐留によつてその安全性が担保される
ということが言えると思ひます。

もう一点は、今回のこの十六日の両國の発表
は、これまでここ一年ないし二年の間に続いてき
た米中間の様々な駆け引きの一つの帰結として生
じたという感じを私は強く受けているわけござ
います。これは、ちよつと今日時間があれば外務
大臣、防衛大臣ともお考えを交わさせていただき
たいと思ふんですが、恐らく今回の発表は中國に
とつてはある意味ショックだったんだらうと思ひ
ます。非常に大きな影響を受けた発表だったんだ
らうと思ひます。

そのそもその転機がどこから来ているのか
という、私は、恐らく今年の最初、一月に行わ
れましたワシントンで開催された米中首脳会談
だったんだらうというふうに感じています。一月
の十九日でありまして、胡錦濤國家主席が一月十
九日、ワシントンを訪問いたしました。十九日当

日は少し大人数の会議を、ワシントンで首脳會議
を持つたわけでありまして、同時に、到着した前
日の晩、十八日の夜に少人数のワーキンググ
ループを開催しています。これはアメリカ側からの
要望に応じて開催しています。六人で開催をして
います。この両方の会合における米中のやり取り
が、恐らくその後の両國の関係をかなり規定する
契機となつたのではないかなというふうには感
じています。

今日、配付資料でお配りしていますが、その辺
の事情を簡潔に伝えている記事でございます。今
年二月三日の口経新聞の二面に掲載された「風見
鶏」というコーナーで、「ヤルタの教訓が問うも
の」という記事です。この前半三段目までがそ
この辺の要旨を伝えております。

ちよつとこの記事の内容を踏まえて、この一月
の会談で何が起きたのかを御説明したいと思ひま
す。まず、この一月十九日の米中首脳会談で
けれども、この首脳会談に至るまで相当両國では
交渉が難儀したというふうな聞いております。具
体的には、中國政府の方は既に一九八五年に海洋
強國戦略というものを劉華清提督のイニシアチブ
の下に策定をしまして、以来、南シナ海、東シナ
海で中國海軍がプレゼンスを拡充する、そうした
計画、行動を着々と進めているところでありま
す。この十九日の会談というのは、恐らくこの八
五年以来の中國の戦略を中國政府が初めてアメ
リカに対して是認を求めた場だらうと、私自身はそ
ういふふうな総括をしております。

この共同声明を作るに際して、特にアメリカ側
から要人が北京に何度も足を運んだわけでありま
すが、まず、ヒラリー長官が事前に北京に行つた
ものの話合いが付かなかつたと。キャンベル氏が
もう一度行つたけれども、それでも話合いが付か
なかつたと。ここまでは合計何時間も掛けてい
るわけでありまして。この首脳会談の当日、一月十
九日の朝四時ごろまで掛けて交渉して、ようやく
何とか共同声明をまとめたというふうな言われて
おります。

日ハ少し大人数の會議を、ワシントンで首脳會議
を持つたわけでありまして、同時に、到着した前
日の晩、十八日の夜に少人数のワーキンググ
ループを開催しています。これはアメリカ側からの
要望に応じて開催しています。六人で開催をして
います。この両方の会合における米中のやり取り
が、恐らくその後の両國の関係をかなり規定する
契機となつたのではないかなというふうには感
じています。

中國側がこの場で要請したことは、中國の核心
的利益を米國が尊重するという文言をこの首脳會
談の共同声明には是非入れたらうと、こういうこと
がありました。この中國の核心的利益なんですが、
この共同声明に入れることを米國側は拒否をして
おります。その前後で実は中國側の姿勢がこの核
心的利益について大きく変わつてきています。つ
まり、この首脳會談の前には中國の核心的利益の
中には南シナ海が含まれると中國側は様々な場
で言つておりました。ところが、この首脳會談の後
はそれは明言しないようになりまして。現在では
中國の核心的利益は台湾だと、こういう言説が広
く中國側によつて使われているというふうには私
は認識をしております。

この十九日の首脳會談に先立つ十八日の夜の會
食ですが、ここではホワイトハウスで六人だけの
ワーキンググループになつたと。アメリカ側はオ
バマ大統領、クリントン長官、それからドロン
補佐官、中國側は胡錦濤氏、楊潔篪氏、戴秉國
氏、この六人だったということでありまして。

ここでアメリカは、こいつた少人数の會食を
すること自体が異例なんです、中國の本音の話
を聞こうとしてこの會食を設定したということ
でありまして、議題は三つでありました。一つは北
朝鮮問題、それから人民元の切上げ問題、三番目
に中國の人民解放軍のシベリアコントロール問
題、この三点でありました。内容がどうだったか
という、米國側の期待に反して中國側からこれ
らの論点に対して返つてくる答えは公式聲明の繰
り返しに似たものだったということでありまして。

この二日間にはわたる會議とその前後の交渉、折
衝を含めて、中國側は、先ほども申しましたよう
に、南シナ海を含めて台湾、そして朝鮮半島を核
心的利益として認めてほしいと、その代わりそこ
から出ていくことはしないという言わば取引をし
たかつたのではないかと私は推測をしております
す。一方、アメリカは、そこまで徹収するつもり
はないということ、これを切つたわけでありまして
が、アメリカ側が内部で総括している話を聞きま

すと、中國は米中がアジアを仕切るG2体制を望
んでいるが、それは無理だと明確に伝えた、こ
ういふ総括をアメリカ側ではしております。
この後、米中關係が、それ以前G2という言葉
が喧伝されたものが大きく内容が変わりまし
て、明確にアメリカが中國のアジア、特に南シ
海、東シナ海における海洋進出を抑制するとい
う方針に踏み込んできたのではないかと私は考
えているところでありまして。

こいつた流れを踏まえて我が國の防衛政策を
取つていくこと、あるいは外交政策を取つてい
くことが当然ながら必要になつてくると思ひます
けれども、この点、外務大臣、防衛大臣、何か御感
想あるいはお考えがあればお聞かせいただきたい
と思ひます。

○國務大臣(安葉光一郎君) 風間委員がおつしやつ
た二〇一一年の一月十九日のワシントンでの米中
首脳會談、そしてその前の二〇〇九年十一月十七
日の北京での首脳會談、確かに変わったところが
ございました。今おつしやつたように、双方は互
いの核心的利益を尊重することが米中關係の安定
的發展を確保する上で極めて重要であるとの認識
で一致したというのが二〇〇九年でございます
が、二〇一一年は、今おつしやつたように、核
心的利益との文言は盛り込まれなかつたというの
が、おつしやるとおり九年と一一年の大きな違
いだというふうな考えております。

その上で申し上げますと、やはり特に海洋とい
うのは公共財でございます。この海洋という公共
財を、私は、幅広く多数國間で議論をしていくと
いうことは非常に大切なことであるということ
をASEANの各國の外相にも説明をしてきたとい
う経緯があります。

ただ、私の立場として申し上げられるのは、特
定の國を念頭に置いておられるわけではないとい
うことでございますけれども、やはりこの海洋とい
う公共財について、例えば海賊の問題も捜索救難の
問題も海洋環境の汚染の問題も含めて、幅広い
テーマで、何回も言いますが、多数國間で議論を

して行く、そういう場を設けていくということが大事だということでございます。

今回のEASでは、御存じのように、米口が初参加をしたという中で、いわゆる海洋、公共財である海洋ということについても国際法の尊重といういわゆる大原則を盛り込んだという意味は、私はその重要性を確認をした意味というのは非常に大きいのではないかと、そういうふうに考えているところでございます。

○国務大臣(一川保夫君) 中国が近年大変な経済成長を遂げてきたことは事実でございますし、そういう中であつて、先ほど先生の方から話が出ましたような、東シナ海なり南シナ海等に向けて大変いろんな活動が活発化してきたというのは事実でございます。

そういう中で、沿岸の諸国といるとトラブルが生じてきているというような情報も我々も接しておりますけれども、そういう中であつて、今回の、特に東アジア・サミットと称していいような会合が今回持たれたと思っておりますけれども、そういう中で野田総理大臣も、そういう海洋法等の国際的なルールをしっかりと守るべきだということとか、あるいはまた紛争が生じた場合の平和的な処理をしっかりと対応すべきだということとお話とか、あるいは航行の自由をもっとしっかりと確立すべきだということを問題提起されたというふう聞いておりますけれども、そういうことも含めて私たちは、今回の、今、米中韓における、まあ日本も含めて、この東南アジアの地域のいろんな情報をしっかりとキャッチする中で間違いない判断をしていかなければならない時代に来ているという認識を持っておりまして、先ほどのお話に出ましたように、やはりその各沿岸というか、この東シナ海、南シナ海に接する、そういう諸国の皆さん方が多国籍でいろんな合意形成を求めていくということが非常に重要な時代ではないかというふうに私自身は考えておりますし、また中国と日本との関係もしっかりと、防衛上の問題、安全保障上の問題についても

しっかりと話し合っていくことができる、そういうような交流関係をしっかりと築いていくということも一方では大事だということに考えております。

○風間直樹君 両大臣おっしゃる通りに、中国を包摂すると、こういう仕組みをつくるということも非常に大事な取組だと思っております。

同時に、我が国の安全保障上の様々な努力としては、昨年末の新防衛大綱、それから今年ですか、五月に日米の2プラス2で動的抑止という概念が盛り込まれているというふう聞いております。こういう取組をなされているわけでありまして、この取組が何を意味するのかについては、また今後の委員会で議論をさせていただきたいと思っております。

これで終わらせていただきます。ありがとうございます。ございました。

○佐藤正久君 自由民主党の佐藤正久です。まず、閣僚の心、これについて議論をさせていただきたいと思っております。

大臣、信なくば立たずという言葉がございまして、普天間問題が進展しない理由の一つに、民主党政権の閣僚の中で、沖縄県民、とりわけ沖縄県知事とうまく関係ができていない、特に知事が胸襟を開いて話すことができる関係がないということが一つの問題だと思っております。政治は心と言われている。震災対応もそうです。被災者に寄り添うと口では言っても、心がなないと、それは言葉とかあるいは立ち居振る舞い、政策へみんな跳ね返ってきます。

菅前首相、玄葉大臣の地元の田村市の体育館の方に避難者の慰問に行かれました。ところが、全国に報道されたように、二家族ぐらいいしか挨拶をせずに帰ろうとした。残りの方々がいつぱいいた。葛尾村から避難されていたお父さんがもう帰るんですかと言ったら、慌てて帰ってきて、済みません、気が付きませんでした。うそですよ、体育館の中です。そうしたら、奥様から、もうあなたの言葉は信用できませんと言われたら、菅首相は、済みません、反省させていただきます。

ああいう映像は見たくありませんでした。また、お盆までに仮設住宅を造り切るという約束をしていました。ところが、それはできなかった。八月二日はもう辞意を表明された。東北の方に行つて、そしてできなかった理由を説明し、今後の対応を説明するのかなと思つたら、その日の夜からは毎晩飲み歩き。新聞に全部出ていますから。被災地の方々は、見てがっかりしてしましたよ。さらに、今度、お辞めになつてから東北に足を運んでいろいろ被災地対応をやると思つたら、行つていられるのは今度四国の方にお遍路、しかも警察のSP付きですから。マスコミの前でおいしそうにアイスクリームを食べている写真が雑誌に載つてしまつた。

やつぱり、こういうのを見てしまつたら、被災者に寄り添うと言つた首相の言葉はどうなんだと。これでは国民との信頼、信なんかつくれつこないと思つてもいいけれども、玄葉大臣、福島議院議員です、どう思われますか。

○国務大臣(玄葉光一郎君) 個人のことを申し上げるのは避けたいというふうに思いますが、私も当時、国家戦略と政調会長という立場で三、一を迎えたわけでありまして。そのときの記者会見などでも何度か言つた、被災者の立場に立つ、心に寄り添うという話は何度かさせていただいて、当時かなり厳しいことも私自身が公の場で申し上げた経緯も率直に言つておきます。

いずれにしても、できる限り相手の立場に立つ努力というのをそれぞれ精いっぱいやっていかなきゃいけないというふうに考えます。

○佐藤正久君 精いっぱいではなくて、やらないといけないんですよ。だから結果が出ないんですよ。実際、このお遍路に行つていられるときのSPのお遍路の服装は自腹たそうですよ。そこまでやっている。心がなと思つてますよ。

実際、防衛大臣、今、原発対応でもうずっと泊まり込みで缶詰、レトルトですよ。コンビニのああいふ弁当も食べれない状態でやられている隊員がいるんですよ。そういうことも考えながらしっかりと

り心を持つて本当に被災地対応つてやらないと、結果なんか出ません。

私、菅前首相、やつぱり心がなと思つてますよ。でも、一川大臣もやつぱりそういう面では、心がなないんじゃないか、自覚が足りないんじゃないかというふうな思わざるを得ない、残念ながら。特に、この前のプータン国王を招いての宮中晩さん会、これを欠席して民主党議員の政治資金パーティーに参加していたことが判明し、そしてそのパーティーの中で民主党参議院議員の政治資金パーティーが宮中晩さん会よりも大事だと発言した。プータン国王を招いての宮中晩さん会より民主党参議院議員の政治資金パーティーが大事、だからこつちに来たんだと発言した。これは、防衛大臣として素人とか玄人、そういう以前の問題ですよ、これは。これは余りにも自覚がなさ過ぎる。これは、皇室としてプータン国王に極めて非礼だと思つてませんか、防衛大臣。

○国務大臣(一川保夫君) 今ほどの先生が御指摘になつた、プータン国王の宮中晩さん会の折の私の言動については深く反省いたしております。

今からそういう言い訳も認めないことを一切言うつもりもございせんけれども、私自身も、そういう面では、プータン国王の宮中晩さん会に欠席をするという届けを出すときが若干早過ぎたというふうなことも含めて反省すべき点があつたと思つて、またその会場の発言についても深く反省いたしております。

○佐藤正久君 これも心なんです。心があればこんな発言しませんが。欠席なんかもしない。防衛大臣、仮に米国の大統領を招いての宮中晩さん会あつたら欠席していませんか。

○国務大臣(一川保夫君) それは、何というんですか、そういうことに対する回答は即ちちよと難しい判断ですけれども、私は、非常に国会の日程等が流動的であつたというふうなことも含めて、突然にこういう行事に欠席するということが逆に失礼に当たるということで欠席の届けを出させていた、いたというのが今回の対応でございます。